



沖縄、八重山群島の海に広がる見事な造礁サンゴ。しかし、よく見ると白くなりかけている部分や瓦礫のようになってしまっている部分がある

第三章 壊されていく海 サンゴの白化 磯焼け

◇ニライ・カナイ 沖縄

ボクにとって沖縄の海は特別です。

なぜなら、生まれて初めて潜ろうとして潜れなかった悔しい思い出があり、その悔しさを晴らすためにダイビングを始め、ついにはプロダイバーになったきっかけの地でもあるからです。

もちろん、それだけではありません。

沖縄の海やサンゴ礁の美しさは、世界でも5本の指に入るとわれています。著名な海洋学者やダイバーの中には、「沖縄が世界一だ」と言う人が少なくありません。ボクもその一人です。

澄み切った海の中、見事に広がる

美しいテーブルサンゴは、まさに「ニ

ライ・カナイ」（沖縄の言葉で、海

の彼方の楽園」という意味）。昔話

に出てくる竜宮城ではありません

が、「絵にもかけない美しさ」とい

う表現がぴったりの海です。

そんな美しい沖縄の海ですが、さ

まざまな変化や、数々の試練にさら

され続けています。

たとえば、沖縄ではサンゴを食べ

るオニヒトデが繰り返し大量発生



え、海水に溶け込む二酸化炭素の量が増えると、「海の酸性化」という問題も起きます。

すると、カニやエビなどの甲殻類、貝、サンゴなどはカルシウムの形成に障害を起こしてしまいます。

ちょっと難しい話になりましたが、今、海の中で起きていることは、だれにとつても他人事ではありません。地球上すべての生き物に関係しているということを理解し、自分のこととして考えて欲しいのです。



瀬戸内海に浮かぶ山口県上関町の祝島の海中。豊かに茂る海藻の森も、今は深刻な磯焼けに襲われている

くれますが、海藻や植物プランクトンの数が減ればどうなるでしょう。

海の二酸化炭素の吸収力が落ち、結果として大気中に二酸化炭素が多く残ってしまいます。

さらに、石油や石炭火力発電、石油製品の使用によって、二酸化炭素の排出量は年々増加しています。

そのため、大気中の二酸化炭素の量は益々濃くなり、地球温暖化が加速してしまふのです。

また、大気中に二酸化炭素が増



自由に泳ぐイルカ

胸が締め付けられる思いがします。

エコーロケーションシステムといって、イルカはおでこの所にあるメロン器官という部分から音波を出して、遠く離れた仲間の位置を知ることができます。

広い海に暮す場合はそれが役立ちますが、狭いプールの中におしこめられてしまったらどうでしょう。反射して苦しんだりしないのでしょうか。

また、水族館で多いバンドウイルカは「泳ぎの達人」の別名を持っており、

1日に50〜60kmは泳ぐと言われています。時速50kmの速度で泳ぐことができ、潜水距離は数100mといわれていますが、水族館の狭いプールにおしこめられたらどうでしょう。自由に泳ぐことができなくなります。

イルカは高い知能を持ち豊かな感情を持つ哺乳動物です。群れで生活していたのに、仲間や家族と引き離されたらどうでしょう。

水族館のイルカのほうが、野生のイルカより早く死んでしまうという調査結果もあります。自分がイルカだったらと考えれば、早死にになってしまう理由も分かります。

イルカショーを見て、「イルカが嬉しそうに笑っている」という人がいますが、イルカは口角が上がっているため、角度によっては顔つきが笑顔のように見えるだけのことです。

もし、イルカを見たいと思うのなら、狭いプールに閉じ込められたイルカではなく、イルカウォッチングに参加してみるのはどうでしょう。